

資史料館が設置されました

平成 25 (2013) 年 4 月 1 日に博物館に資史料館部門が設置され、活動を開始しました。従来の博物館機能は博物館部門として位置づけられることとなりますが、対外的には分かりやすいように、博物館及び資史料館と称することになっています。両者を博物館として一体運営することによりコストパフォーマンスの向上が期待されます。2011 年に開設された博物館が新機能を獲得し進化したと考えると分かりやすいでしょう。

資史料館 (部門) はどのような仕事をするところでしょうか。年史編纂が一番分かりやすい例かと思えます。実際、平成 23 (2011) 年 9 月に刊行した「東京工業大学 130 年史」の編集では、10 年前や 20 年前の記録がどこにあるか分からず、執筆に支障をきたしました。多くの方々に原稿を依頼しましたが、「資料も無しに原稿を書けというのか!」とお叱りも受けました。そんなわけで、多くの場合、個人的に保存していただいていた資料に頼らざるを得ず、苦勞の連続でした。「この状態を今後も続けては 150 年史を担当される方々が気の毒だ、何とか資史料室のようなものを作って、体系的に歴史的価値のある文書を保存する仕組みを今から作っておこう」という機運が高まり、伊賀前学長及び三島現学長をはじめとする執行部の理解が得られました。



もう一つ、資史料館の設置を後押しした流れがありました。平成 23 (2011) 年 4 月に公文書管理法が施行され、官庁の行政文書のみならず、大学等の法人文書もこの法律の適用を受けることになったのです。大学では日々膨大な数の文書が作られていますが、これらには学内の文書規定によって一定の保存期間が定められています。この保存期間満了の時点で国立公文書館に移管して保存するか、あるいは廃棄するかを決めなければなりません。二者択一で、適当に持ち続けることはできないことになっています。国立公文書館は主として重要な行政文書を保存するための施設ですので、大学の法人文書等を受

け入れる余裕はほとんどありません。大部分の法人文書は廃棄せざるを得ないのが現状です。本学の規定でも、ほとんど廃棄することになっています。

これでは、我国の工業教育において中心的役割を果たしてきた本学の歴史的に価値のある、あるいは将来重要になる文書類が失われてしまい取り返しのつかないこととなります。本学のみならず、社会全体にとっても大きな損失です。そこで考えられたのが、資史料館の中に公文書室を作って、国立公文書館相当施設 (国立公文書館等) としての指定を受け、そこに大学の Fact data や意思決定に関する重要文書を保存する方式です。すでに東北大学、名古屋大学、京都大学、神戸大学、広島大学、九州大学がこの方式を採用しており、大阪大学も準備中と伝えられています。関東地区の大学の動きが鈍いのが、内閣府の公文書管理課でも気になっているようです。

このように年史編纂と公文書管理法に則った学内文書の効率的管理体制を構築する必要性から、資史料館構想が強力に推し進められましたが、資史料館にはもう 1 つ大きな役割があります。世界に冠たる地位を築き上げてきた本学の歴史とこれから目指すところを、資史料館を通じて学生、特に新入生に知ってもらい、自分もその一員であるという帰属意識を高めてもらうことにより、勉学ひいては研究にいそむ心を育成することです。若い学生が持つポテンシャルを大学が目指す方向 (ベクトル) に同調させる有力な手段となり、教育上の貢献も大きいといえます。

年配の同窓生の方々には、資史料館の設立は願ってもないことでしょう。第一線を退くと気持ちの上で余裕ができ、自分のルーツともいべき母校が恋しくなります。東工大は今どうなっているだろう、昔の面影は残っているだろうかという思いとともに、学生時代はあまり気に留めなかった母校の歴史にも興味をわいてきます。「この製品は東工大の発明だ」と孫に教えたくもなるでしょう。孫には及ばないにしても、資史料館と聞けば目に入れても痛くないほど可愛いのではないのでしょうか。すでに高額の寄付をしてくださった上に、遺贈の手続きをとってくださった先輩がおられます。母校 (資史料館) をわが子の一人とみなして、遺産の何分の一かを寄付していただく仕組みが遺贈です。日本でも普及し始めているようです。本学でも受け入れ態勢を整え、この制度を活用したいものです。

先人の努力と志が資史料館という“根”を通して若い学生に吸い上げられ、成長の糧になることを願ってやみません。そのためには、物語風に分かりやすい形で資史料を提示するための調査・研究も欠かせません。将来的には活発な研究活動によって、社

会があつと驚くような「東工大ドラマ」を編纂し提供していきたいと思ひます。



内装を終えた資史料館。延べ床面積は約 250 m² であるが、天井が高いので、積層書庫(3 層式)を設置すれば かなり広く使える。現 地球史資料館の上に位置する。

パンフレットや定期刊行物、さらには個人や団体等からの寄贈文書等は単純に資史料館に収蔵し、厳密な管理が要求される公文書室には、大学の意思決定を示す文書等、厳選されたもののみを収蔵し、スペースや人件費の負担軽減を図る方針です。場所は、本館3階の奥です。ここは、初期の図書館(今となつては、旧々図書館、1934~1973)跡地ですが、学生時代にこの図書館を利用された年配の方々には懐かしい場所かと思ひます。資史料館の内容の充実と文書保存/管理サービスの提供

までにはしばらく時間がかかりますが、ご支援とご協力をお願いします。

当座の連絡先：博物館事務室(百年記念館 2F)

03-5734-3340

centshiryou@jim.titech.ac.jp

謝辞：設立の経緯は省かせていただきましたが、実現に向けてご努力いただいた設立検討部会の構成員は次のとおりです：飯塚久夫・岸本喜久雄・広瀬茂久・亀井宏行・奥山信一・梶雅範・小尾欣一・道家達将・山田道夫・小島浩孝・坂口広志・西山和徳・佐藤政弘・橋本美克・遠藤康一・阿児雄之・松本胤明・竹田和彦・小寺孝志・乙津昌弘。特に博物館関係者と事務を担当していただいた研究推進部の方々には年度末の忙しい時期にもかかわらず多大な協力をしていただきました。新館長大谷 清 理事・副学長のもと、4月からは、事務の組織変えに伴い、総務部の広報・社会連携グループの世話になっています。